



社会科

公開授業②

-Challenge to Creative Lessons-

CCL

「なつかしい未来」を追究する 社会科授業づくり

第3学年 長野 由知



1. 今なぜ「なつかしい未来」か

知識基盤社会は、①知識には国境が無く、グローバル化がいつそう進む、②知識は日進月歩であり、競争と技術革新が絶え間なく生まれる、③知識の進展は旧来のパラダイムの転換を伴うことが多く、幅広い知識と柔軟な思考力に基づく判断がいつそう重要になる、④性別や年齢を問わず参画することが促進される、などの性格がある。このような社会においては、自己の思考をより科学的なものへ再構成し、自分なりに知識を構造化していく習慣や能力をもち、創造的に社会に参画する人物が求められる。

ここでいう創造とは、人が問題を異質な情報群を組み合わせて統合して解決し、社会あるいは個人レベルで、新しい価値を生むことであるⁱⁱ。つまり、従来の延長線上で解決策を考えているだけではなく、より異質な情報群を視野に入れながら柔軟に見方を変えて様々な角度から考えて問題解決を行うことができなければならないだろう。

赤堀（2009）は、「温故知新」の発想に基づいた戦略で復活した企業の事例を紹介し、「古きもの」が「ポストグローバル資本主義時代」の日本の在るべき姿を模索するうえで重要な役割を果たすと主張しているⁱⁱⁱ。実際、既に過去の事例や先人の知恵に学び、形を変えながら問題解決を図り新たな局面を切り開いている事例は見られるようになっている^{iv}。

そこで、「なつかしい未来」を追究する社会科授業、すなわち、子どもたちが社会事象を柔軟にとらえながら過去の事例や先人の知恵に学び、それを新しい社会の創造につなげていくような授業づくりをめざしたいと考えた。

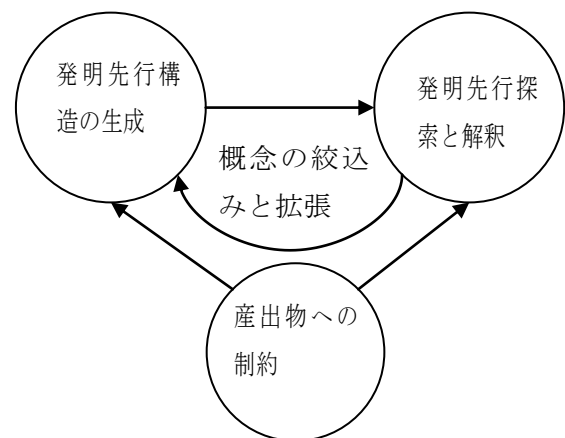
2 「なつかしい未来」を追究する授業づくりのために

(1) 意思決定型の授業づくり

社会科の目標は、社会認識を通して市民（公民）的資質を育成することであると一般的に言われる。鴛原（1999）は意思決定型の学習について、「21世紀に向けて、社会の様子が激しく変化しているだけに、子どもたちは、それに関心をもち続け、絶えず事実認識を繰り返すことが要請されることになる。このような中で、社会科の最終的な目標としての「公民的資質」を論じる際、「意思決定力」は、自己を「コミット」する学び、「社会参画」する学びを構築する、きわめて重要な資質といえる。」^vと述べている。

これからの時代を生きる子どもたちが、実践的な判断を生み出す必要性を感じ、実際にその機会を保障していくためには、意思決定型の授業の計画が求められる。意思決定とは、判断を生成することに他ならない。

フィンケ（1999）は、人間の創造のプロセスは、イメ



ジェネプロアモデルの基本構造
（フィンケ：1999）

ージを形成する生成段階とそれを解釈する探索・解釈段階の相互作用であり、そして、産出物や産出の
手続きに関する制約が生成段階、探索・解釈段階それぞれに作用する、というジェネプロアモデルを提
唱している^{vi}。人は当該事象にかかわる問題の解決策を考えようとする時、当該事象にかかわるある程
度の情報を保持することでそれが制約として働き、その制約に基づいてアイデアを生成したり、解釈を
行ったりする。そのようなプロセスを歩んで、より妥当な解決策を生み出すことができるとする。

つまり、子どもの意思決定を迫る際には、扱う社会的事象を自己の問題としてひきつけさせておくこ
と、問題を考えるだけの豊富な知識をもたせておくこと、そして、解決策を考えさせる問題が明確に
絞り込まれていることが必要になる。

(2) 子どもが柔軟に考え、認識の再構成を促すために

稲垣（2007）は、子どもに自己の理解の不十分さを自覚させる方略として、既存の知識に反する事実
や情報を提示し「驚き」、「当惑」、「協調欠如」の喚起を引き起こすことが有効であるとしている^{vii}。

一方で、既存の知識に反する事実や情報を提示するだけでは変化を引き起こすだけの強力な動機付け
につながらない可能性も指摘している。新しい情報によって生み出された知識の不整合を無視したり、
局所的な修正で済ませてしまったりさせないためには、他の人と話し合いを行い相互交渉する機会を設
定する必要があるという。

人は他者とはたらきかけ合うなかで自らの考え・知識を構成していく^{viii}。他者と相互に作用し合い、
協同活動する経験と過程の中で認識が成立されていく。とりわけ、似た立場で情報量の違いが小さい他
者に対しては、お互いの発言の審議や妥当性を吟味しながら話し合いが進むことになる。異論反論を許
容する自由な雰囲気の中で学習が展開されれば、効果的に認識を再構成させていくことができると考
える。

そこで、今回の授業では、子どもを揺さぶりながら自己の不十分さを自覚させること、そして、子
どもの相互作用を引き起こすため学習環境を工夫することに配慮したい。

三原の節分行事「鬼の豆」とは

節分の2月3日。三原駅周辺の旧市街地を中心に、宮浦地域、宮沖地域に残る風習で、子どもたちが
「鬼の豆ください」といいながら商店を回り、お菓子をもらう和製ハロウィンとも言える行事である。

1950－60年代は、豆まきの残りの炒り豆を配るのが主流だった。近所の民家も商家も回るのが元々
の姿であったが、近年はお菓子をもらえる商店を中心に子どもたちが回るようになっている。

商店にとっては、子どもたちをお客さん扱いにして、大勢来れば福が舞い込み商売繁盛につながるも
のと考えられている。実施している地域の商店側では、他にも「子どもの社会勉強だから」「ふるさと
三原を大切に思っしてほしいから」と、さまざまな思いを持たれている。地域の伝統行事ということで、
例えお菓子屋ではなくてもお菓子を予め購入し、子どもたちに配ってくれている。

「鬼の豆」の変化の背後には、都市化、生活の自動車化、共働き化、地域住民の高齢化など、社会の変化があり、地縁コミュニティの変化とともに姿を変えてきていると言える。近年では、行事の意味を解さない子どもや保護者のマナーの悪さや、増大し続ける金銭的負担などもかかわって、取り組みを辞める商店も増えてきている現状がある。過去には、子どもが回る範囲も狭く限られていたため、近所の顔なじみの範囲と一致していた。また、子どものおつかいも日常的で近隣の様子についてもよく知っていたため、「鬼の豆」の日にも忙しい時間帯を避けて訪れるなど節度があったという声も多い。

この行事のおこりは、上田茂さん（元市職員）が古老の聞き書きをして集めた情報によると、三原に寺や大師堂が多いことと関係があるのではないかと。托鉢やお接待に応じる心根が、鬼の豆につながったのではないかと。市史にも記述は見当たらず、実際のところははっきりしていない。

なお、広島市にも「鬼の豆」の風習が残っていたとの記録があるが、原爆によって地域コミュニティの歴史が途切れ、現在では行われていないという。

【「鬼の豆」が行われていた地域】



(地図中の○囲み、「本校」の記述は筆者)

-
- i 平成 17 年の中央教育審議会答申「我が国の高等教育の将来像」
- ii 高橋誠[編]『新編 創造力事典』, 日科技連出版, 2002, p. 19
- iii 赤堀たか子[著]『復活企業 強さの理由 時代の変化をチャンスに変える! 小さな社会の底時から』, PHP ビジネス新書, 2009
- iv 一例をあげれば, 高齢化, 少子化, 成熟化, 情報化, 様々なキーワードが融合する混沌とした市場において, 「御用聞きビジネス」が注目を集めている。詳細については, 藤沢久美[著], 『なぜ、御用聞きビジネスが伸びているのか 顧客が自然に集まる 10 の発想転換』, ダイヤモンド社, 2005 を参照されたい。
また, 授業化の一例としては, 拙稿「どうなる? これからの販売業「御用聞き」の復活!?', 広島大学附属小学校学校教育研究会[編]「学校教育」No. 1133 (2011, 12月号), pp. 46-47 があるので参考にしていただければ幸いである。
- v 駕原進「「構成主義」的アプローチによる社会科「意思決定」型学習指導過程—心理学における「多属性効用理論」及び「自己フォーカス」を援用した中学校公民的分野「家族と社会生活」を事例に—, 全国社会科教育学会『社会科研究』第 51 号, 1999, pp. 41-50 : p. 42
意思決定型授業づくりについては, 小原友行「社会科における意思決定」, 社会認識教育学会[編]『社会科教育学ハンドブック』, 明治図書, 1994 も参考にした。
- vi フィンケ[著], 小橋康章[訳]『創造的認知—実験で探るクリエイティブな発想のメカニズム—』, 森北出版, 1999 (Ronald A. Finke, Thomas B. Ward, Steven M. Smith, "Creative Cognition: Theory, Research, and Applications" The MIT Press, 1992) : pp. 19-49
- vii 稲垣佳世子「概念変化: 知識の大幅な組み替え」, 稲垣佳世子[他編]『新訂 認知過程研究—知識の獲得とその利用—』, 放送大学教育振興会, 2007, pp. 32-47
- viii 佐藤公治[著]『認知心理学からみた読みの世界—対話と共同的学习をめざして』, 北大路書房, 1996 : p. 30
- ix 三原の節分行事「鬼の豆」についての情報は極めて少ない。ここでの記述は, 2008 年 2 月 1 日 中国新聞備後版フロントライン備後「三原の「鬼の豆」つーかーしゃあ」, 及び, この新聞記事を書かれた中国新聞論説委員石丸賢氏へのインタビュー (2010 年 12 月), 元三原市職員の上田茂氏へのインタビュー (2011 年 1 月) からまとめたものである。